



市民の豊かな暮らしと
観光客を受け入れるおもてなし

柳川市掘割と観光の共生のあり方検討委員会 提言書

掘割を活用した 持続可能な観光推進案

令和5年2月

柳川市掘割と観光の共生のあり方検討委員会



目次

はじめに	2
第1章 柳川観光の現状把握・将来像の確認と取り組むべき課題の整理	
1 柳川観光の現在地	3
2 目指すべき将来像	5
第2章 時代の潮流やアンケートから見えてきた課題	
1 時代の潮流からの読み解き	6
2 市民・観光客へのアンケート結果と読み解き	6
3 課題のまとめとカテゴリ分け	7
4 取り組むべき課題解決の方策及び緊急度と優先度	8
第3章 掘割を活用した持続可能な観光推進案（最優先方策）	
提言1 親水性の向上（快適な水辺環境の充実）	12
提言2 掘割の美化・愛護活動の推進	13
提言3 観光事業者の連携を図る機会の創出	14
提言4 ガイドライン等の策定・遵守	14
提言5 船頭さんや掘割に触れる機会の創出	14
提言6 観光産業の多様な関係者の参画・連携による新たな魅力の創出	15
提言7 観光トレンドの変化に対応した新たな観光コースづくり	15
第4章 その他の取り組むべき掘割を活用した持続可能な観光推進案	16
第5章 掘割を活用した持続可能な観光推進案以外の委員の意見	25
第6章 持続可能なマネジメントの確立	27
カテゴリ毎の委員の意見	28
柳川市掘割と観光の共生のあり方検討委員会 委員名簿	32

はじめに

1 「掘割を活用した持続可能な観光推進案」の位置づけ

柳川固有の文化的財産である掘割は、古来より生活用水や治水、利水に欠かせない地域の財産であり、掘割を活用した観光は水郷柳川ブランドの代名詞となっている。

それを持続可能なものとするため、行政、DMO（観光協会）、観光事業者、市民が一体となった連携によって実現させるものである。

2 「掘割を活用した持続可能な観光推進案」の視点

新型コロナウイルス感染症などによる時代の潮流や社会情勢の変化などを踏まえ「何を優先すべきか、将来に向け何に重点的に取り組むべきか」の視点からの観光推進案である。

3 「掘割を活用した持続可能な観光推進案」の考え方

- ① 長期的視野と短期的視野の両面に立ち、取り組んでいくべき事業を提言するものである。
- ② 委員会の目的である「掘割を活用した持続可能な観光に関すること」「掘割を活用した観光施策として取り組むことができること」について検討した。
- ③ 新型コロナウイルス感染症などによる時代の潮流を踏まえ、行政、DMO（観光協会）、観光事業者、市民の連携はもちろん、国や九州域内の各団体や自治体、福岡県との連携により達成するものである。

4 「掘割を活用した持続可能な観光推進案」策定へのアプローチ

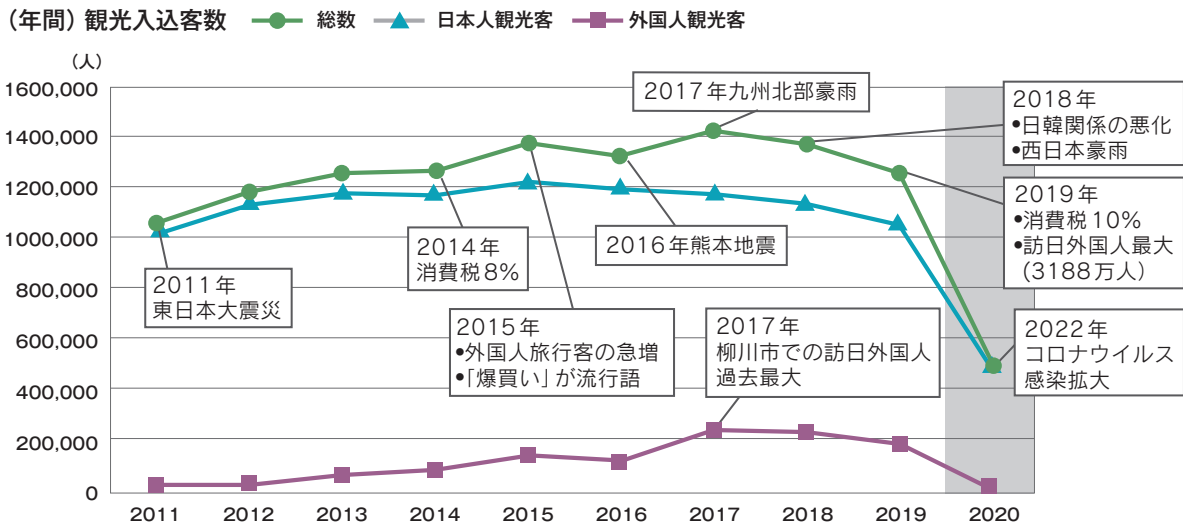
- ① 柳川市の現状、新型コロナウイルス感染症などによる時代の潮流や社会情勢の変化、市民及び観光客へのアンケートの結果を読み解き、結果から読み取れる課題を整理し、委員の意見を尊重し策定した。
- ② 目標達成のため10の課題を選定し、課題解決のため39の方策として整理した。

第1章

柳川観光の現状把握・将来像の確認と
取り組むべき課題の整理

1 柳川観光の現在地

柳川観光の現状分析 —観光入込客数—



**観光業そのものが経済や災害などの外的要因で左右される傾向
→柳川観光も外的要因に左右される傾向が見える**

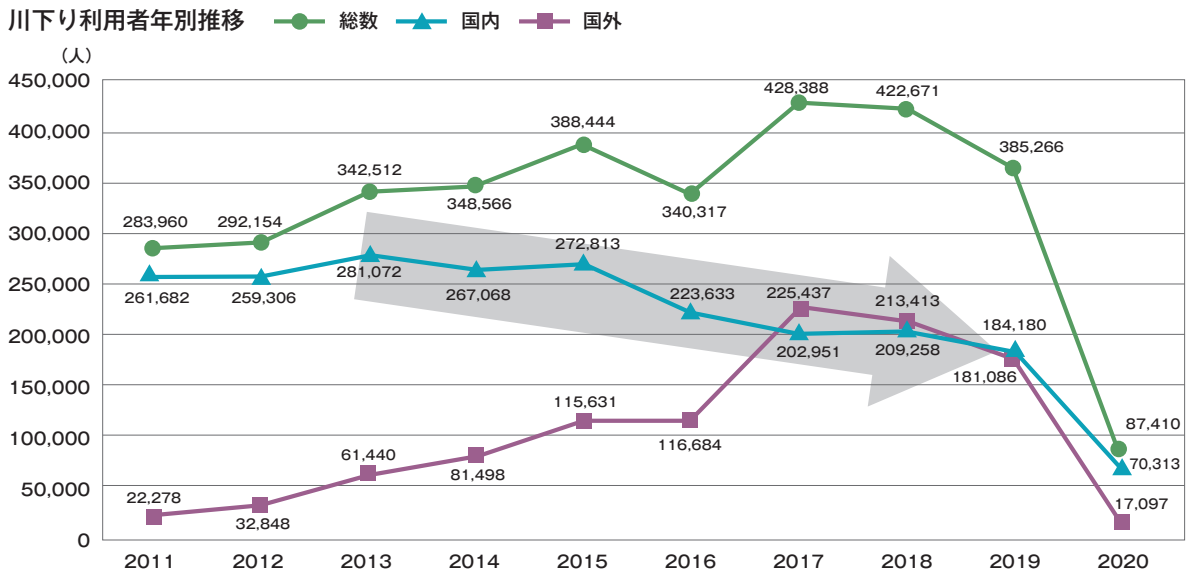
本市を訪れる観光客は、1991年(平成3年)に初めて100万人を超え、以来多少の増減はあったものの順調な伸びを見せ、国の観光立国宣言やビジットジャパンキャンペーン、観光立国基本法の制定なども後押しし、2017年(平成29年)には過去最高となる141万8,400人となった。

この年は、外国人観光客も過去最多となる24万人を超え、川下りの利用客も42万人を超え共に過去最高となるなど、今後の柳川観光に益々期待が持たれていた。

しかし、2020年2月に端を発した新型コロナウイルス感染症が世界中で猛威を振るうなか、観光客は激減し、2021年(令和3年)は487,500人にまで落ち込み、市内観光事業者は大きな打撃を受けることとなった。

また、コロナ禍によるインバウンド需要が見込めないなか、地方志向の高まりやテレワークの普及により、観光施策として近隣地域内での短距離型観光(マイクロツーリズム)や第2のふるさとづくり(ハードリピーターの確保)、ワーケーションなど国内の観光客の誘致にシフトし、アウトドアでの体験型観光など“密”を避ける観光のニーズが増え、ライフスタイルとともに観光のスタイルも変わってきている。

柳川観光の現状分析 ー川下りー



国外旅行者

2013→2019で約12.2万人増加(増加率:300%、平均増加率:24%)

国内旅行者

2013→2019で約9.6万人減少(減少率:34%、平均減少率:8%)

→国内旅行者の消費額は約1.4億円減少(1,500円×96万人)していた

先述したとおり、新型コロナウイルス感染症により、本市の掘割を活用した観光≒川下りも、2021年には、コロナ前の2019年比79.5%減少(2019年36万5,260人→2021年7万4,770人)と大きな打撃を受け、川下りの船頭さんも若い世代を中心に離職者が増え、人材不足も問題となっている。

また、国内観光客に目を向けると2013年をピークに、コロナ前の2019年までの間に約9.6万人が減少している(2013年28万1,072人→2019年18万4,180人)。

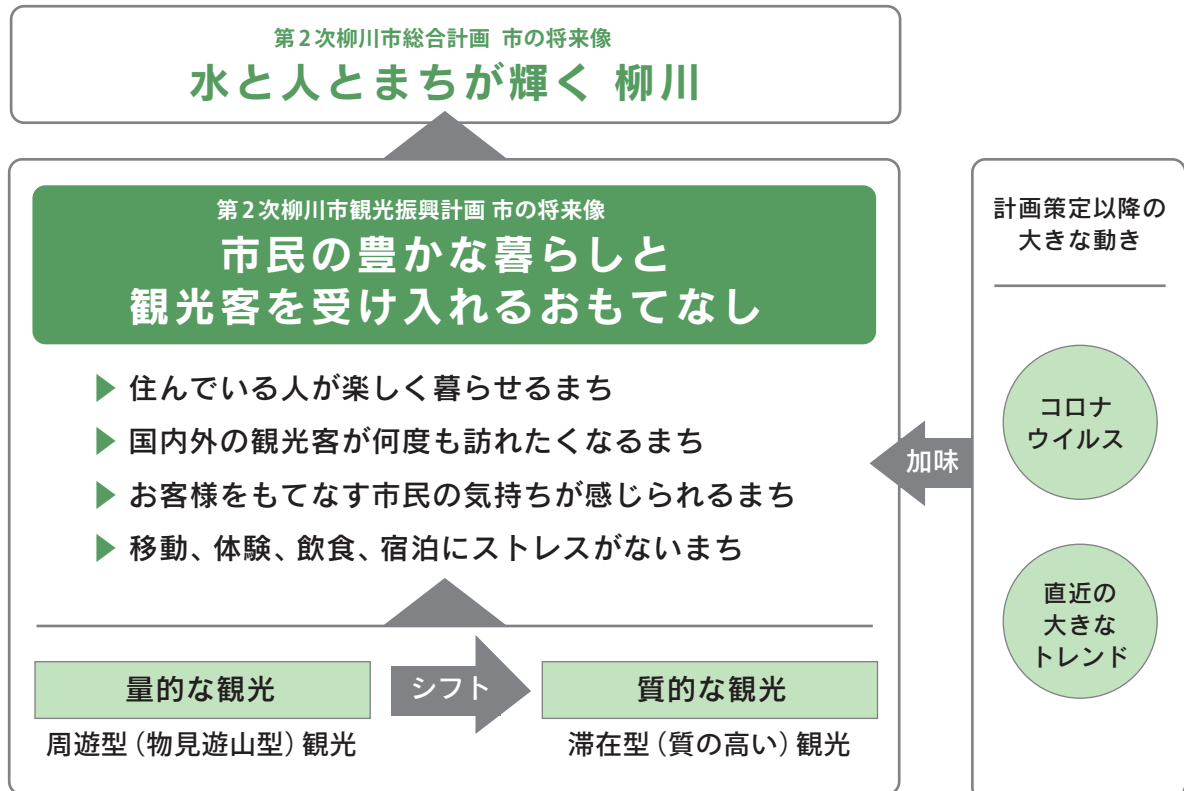
川下りの利用者も2013年から段階的に減少しており、委員会の目的である「掘割を活用した持続可能な観光」を実現するためにも、川下りが始まって約60年が経つ今、原点に立ち返り再度「掘割を活用した観光」≒川下りについて検証し、ウィズコロナ、ポストコロナに向けた新たな取り組みが必要となっている。

2 目指すべき将来像

本委員会が目指すべき将来像は、

「市民の豊かな暮らしと観光客を受け入れるおもてなし」

※第二次柳川市観光振興計画の将来像と同じ



2019年（平成31年）に策定した「第2次柳川市観光振興計画」では、①インバウンド観光の受入れ整備 ②観光コンテンツの再構築 ③市民参加による観光まちづくり ④将来の社会変化への視点 ⑤観光プラットフォーム（仮称）の構築の5つが課題となり、その解決のため、これまでの量的な観光（周遊型観光）から質的な観光（滞在型観光）を目指し、「市民の豊かな暮らしと観光客を受け入れるおもてなし」を将来像としている。

そのために柳川市では、①「住んでいる人が楽しく暮らせるまち」②「国内外の観光客が何度も訪れたいまち」③「お客様をもてなす市民の気持ちを感じられるまち」④「移動、体験、飲食、宿泊にストレスがないまち」の4つをキーワードとし各種施策を実施してきた。

しかし、先述した新型コロナウイルス感染症の世界的流行による、国、九州、県の動きを分析し、さらにインバウンド（外国人観光客）の激減、分散型旅行などへのトレンドの変化、マイクロツーリズムへのシフトなど様々なニーズに対応するため、「市民の豊かな暮らしと観光客を受け入れるおもてなし」を将来像としながらも新たな課題が見えてきた。

第2章

時代の潮流やアンケートから 見えてきた課題

1 時代の潮流からの読み解き

国内人口の減少が予想される現在、観光消費額も比例して減少することが予想されるとともに、柳川市の人口が減少していくことにより、観光業の担い手不足や地域コミュニティの弱体化も懸念される。

またキャッシュレスやネット予約・決済、ネットによる情報収集が一般的となり、デジタル社会への対応も急務となっている。

先述したように、新型コロナウイルス感染症拡大により、密を回避するためアウトドアやマイクログリーン、ワーケーションなど旅行トレンドも変化しており、対応も急務となっている。

D B J・J T B F「アジア・欧米豪訪日外国人旅行者の意向調査」では、日本はコロナ収束後「次に海外旅行したい国・地域」でアジア・欧米豪から1位に選ばれるなど、世界的にコロナ収束後の観光地として日本への期待度は大きい。柳川にとって掘割は「観光の核」でもあることから、ウィズコロナ、ポストコロナに向けた準備も必要となっている。

また、「地域力」をつけるためにも、行政、DMO（観光協会）、観光事業者が主体となって取り組むとともに、市民も含め、それぞれが力を合わせ協働し、掘割を活用した観光振興に取り組んでいく必要がある。

2 市民・観光客へのアンケート結果と読み解き

令和4年4月21日から5月9日までの期間、市民と観光客を対象に「掘割に関するアンケート調査」を実施した。観光客から756サンプル、市民向け662サンプルの回収があった。アンケートからの読み解きは以下の通り。

1 「船頭さん」は川下りの重要な要素

観光客の川下り満足度の自由記述では、船頭さんへの好意的な意見が多く、また、「唄や案内、お話」に関心を持っている方が多いことが分かった。しかし、市民からは「船頭さんの質や船会社で差がある」との声もあった。

2 川下りを利用したいと思う取り組み

観光客からは「夜の川下り」や「川下りイベント」、市民からは、「市民割引」や「川下りイベント」を求める声が多い。

3 観光客と市民の「川下り」の満足度のギャップ

観光客の満足度は非常に高い（川下り全体では93%が満足）。一方で、市民の満足度は観光客に比べ低い（川下りコース沿いの市民55%、川下りコース外の市民59%が満足）。

4 満足度が低いのは「水環境」

観光客、市民共に、他の満足度に比べて水環境の満足度が低い。

5 観光客のリピーター率

若年層の川下り満足度は10代91%・20代80%と高いにもかかわらず、10代20代の若年層で川下り回数「1回」の割合が高い。

6 若年層市民の掘割に接する機会

「掘割に愛着や誇りを感じるか」の設問で、「大いに感じる」を選択したのは70代以上が43%と最も高く、70代未満ではどの年代も20%台となっている。また、この1年間の掘割に接する機会は、14~37%と低い。

特に20代は、掘割に接する機会が「ある」は14%。川下りをしたことが「ない」も28%と他の年齢に比べて低くなっている。

3 課題のまとめとカテゴリ分け

第2次柳川市観光振興計画の課題、そして策定後に発生した新型コロナウイルス感染症などの新たな課題、それに伴う国・県の動向、観光客と市民アンケートから見えてきた課題を踏まえ、委員会では掘割を活用した持続可能な観光推進の観点から、4つのカテゴリに分類し、10の課題を選定し解決策を協議してきた。

カテゴリ1 水郷柳川の文化に関すること

[課題1] 次世代への掘割文化の継承

[課題2] 市民や観光客が掘割に親しむ機会や親水空間の創出

[課題3] 市民協働による掘割の価値の再発見・創造(シビックプライドと観光の融合)

カテゴリ2 景観、環境、地域への配慮に関すること

[課題4] 掘割周辺における名勝指定(水郷柳河)にふさわしい景観や環境に配慮した観光地域づくり

[課題5] 市民生活と調和した観光の推進

カテゴリ3 観光の経済効果に関すること

[課題6] 持続可能な観光事業者の発展

[課題7] 柳川駅西口の利活用に関する合意形成の取得

[課題8] 川下りの名称の統一「川下り」と「お堀巡り」

[課題9] ポストコロナを見据えた観光産業の高付加価値化

[課題10] 満足度の向上によるリピーターの確保

カテゴリ4 持続可能なマネジメントの確立

カテゴリ1~3において検討した解決のための方策を、絵に描いた餅にしないため、マネジメントの主体や方法についての検討。

4 取り組むべき課題解決の方策及び緊急度と優先度

[1] 解決の方策と柳川市の既存条例・計画等との整合性

これらの内容を考察し、課題に対する解決の方策について議論した。ただし、柳川市既存条例・計画等との整合性を考え、委員会で出た意見については、「本委員会からの提言に盛り込み進捗管理を行っていくもの（第3章、第4章記載）」、「柳川市の各種施策にフィードバックし、今後検討していくもの（第5章記載）」の2種類に棲み分けを行った。

「課題解決の方策」の絞り込み 方針



提言する課題と解決ための前提、解決方策は次の表のとおり。

カテゴリ毎の課題及び解決の方策一覧

カテゴリ1 水郷柳川の文化に関すること

Aグループ

Bグループ

課題	課題解決の前提	課題解決の方策
次世代への掘割文化の継承	掘割文化の見える化	継承する掘割文化の定義づけとリスト化 (掘割の歴史・文化・自然・機能・食文化・環境など)
	掘割文化を伝える 仕組みづくり	遊びや生活の中の教育・環境教育の実施 ①掘割文化を継承する学習機会の創出
市民や観光客が掘割に親しむ 機会や親水空間の創出	掘割を楽しめる場所にするための受け入れ 環境整備	②掘割沿いのイベントや受け入れ環境整備 ③安全・安心に楽しめる空間の構築
	住民主体の 公共空間づくり	④親水性の向上(快適な水辺環境の充実)
市民協働による 掘割の価値の再発見・創造 (シビックプライドと観光の融合)	シビックプライドの 醸成	⑤掘割に関わる次世代の人づくり及び キーパーソンづくり ⑥住民参加(特に若者)機会の創出
	住民主体の掘割を活かした まちづくりの推進	⑦掘割に関わるインセンティブ(動機づけ) の創出

カテゴリ2 景観、環境、地域への配慮に関すること

課題	課題解決の前提	課題解決の方策
掘割周辺における名勝指定 (水郷柳河)にふさわしい景観や 環境に配慮した観光地域づくり	生活文化の復元	水辺環境の改善 (根本的な改善と定期的な改善) ⑧本物志向の観光体験の提供
	参加型の掘割環境整備 掘割との共生	水辺環境改善の協力者づくり
市民生活と調和した観光の推進	持続可能な掘割との 関わり 市民の暮らしと観光の 両立	市民に親しみを持っていただくために 水辺環境を改善する
		⑨「市民の声」(船頭さんの声を含む)の データベース化と共有 ⑩掘割の美化・愛護活動の推進

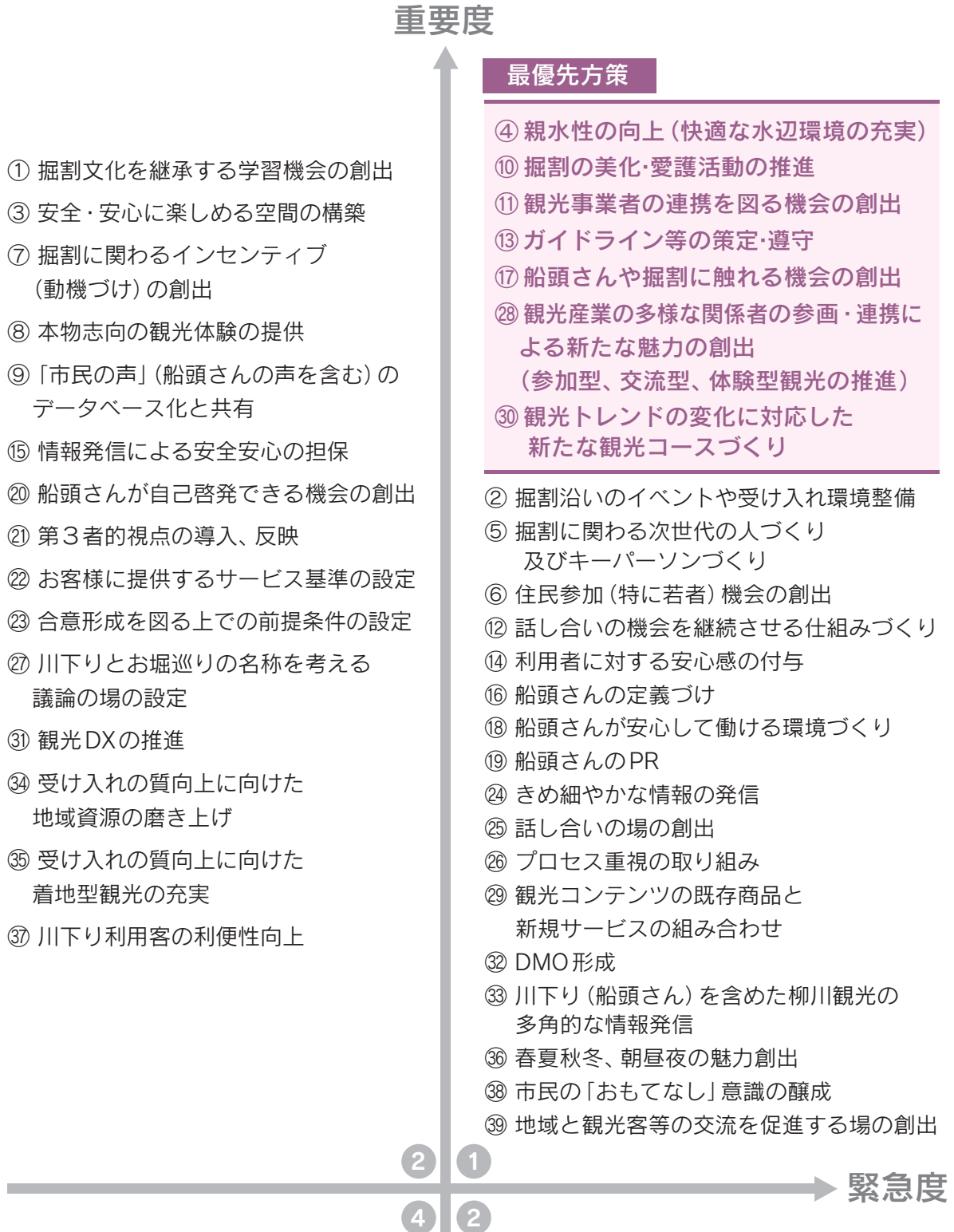
カテゴリ3 観光の経済効果に関すること

課題	課題解決の前提	課題解決の方策
持続可能な観光事業者の発展 (持続可能な掘割観光の推進)	観光事業者の 連携強化	⑪観光事業者の連携を図る機会の創出
		⑫話し合いの機会を継続させる仕組みづくり
	掘割を活用した観光に 係る安全安心の担保	⑬ガイドライン等の策定・遵守
		⑭利用者に対する安心感の付与
		⑮情報発信による安全安心の担保
	船頭さんの人材確保	⑯船頭さんの定義づけ
		⑰船頭さんや掘割に触れる機会の創出
		⑱船頭さんが安心して働ける環境づくり
		⑲船頭さんのPR
	船頭さんの観光資源化 (船頭さんの ブランディング)	⑳船頭さんが自己啓発できる機会の創出
		㉑第三者的視点の導入、反映
		㉒お客様に提供するサービス基準の設定
駅西口掘割の利活用に関する 合意形成の取得 (船着場を設置した場合の 活用方法)	利活用イメージ (前情報)の見える化	㉓合意形成を図る上での前提条件の設定
		㉔きめ細やかな情報の発信
	合意形成の条件 (基準)の見える化	㉕話し合いの場の創出
		㉖プロセス重視の取り組み
川下りの名称の統一 (川下りとお堀巡り)	川下りとお堀巡りの 名称の統一を見据えた 議論	㉗川下りとお堀巡りの名称を考える 議論の場の設定
ポストコロナを見据えた 観光産業の高付加価値化	地域一体となった 面的な取り組みの強化	㉘観光産業の多様な関係者の参画・連携に よる新たな魅力の創出 (参加型、交流型、体験型観光の推進)
	観光コンテンツの 質的向上	㉙観光コンテンツの既存商品と新規サービス の組み合わせ ㉚観光トレンドの変化に対応した新たな観光 コースづくり
	観光DXの推進による 体験価値の向上	㉛観光DXの推進
満足度の向上による リピーターの確保	マーケティング活動の 強化	㉜DMO形成
		㉝川下り(船頭さん)を含めた柳川観光の 多角的な情報発信
	観光の質の向上	㉞受け入れの質向上に向けた地域資源の磨き上げ
		㉟受け入れの質向上に向けた着地型観光の充実
		㊱春夏秋冬、朝昼夜の魅力創出
	受け入れ態勢の充実	㊲川下り利用客の利便性向上
㊳市民の「おもてなし」意識の醸成		
㊴地域と観光客等の交流を促進する場の創出		

[2] 緊急度と重要度の考察

課題解決の方策が決定し、2回に渡り開催した分科会を開催。そのなかで「緊急度」と「重要度」について協議し、また緊急度と重要度が高いものの中から、更に優先度が高いものを最優先方策として7つ選定した。

「課題解決の方策」の緊急度と重要度



第3章

掘割を活用した
持続可能な観光推進案（最優先方策）

カテゴリ1 水郷柳川の文化に関すること

提言1 親水性の向上（快適な水辺環境の充実）

【課題】

市民や観光客が掘割に親しむ機会や親水空間の創出

【解決の前提】

掘割を観光客に楽しんでもらうためには、まず、そこに住む地元の市民が楽しめる空間であることが重要であり、行政、DMO（観光協会）、観光事業者だけでなく、地域住民も主体となった空間づくりが望まれる。

（1）解決の方策

④ 親水性の向上（快適な水辺環境の充実）

（2）求められる具体的施策

柳川固有の財産である掘割に愛着や親水性を持ってもらうため、市民をはじめ、水辺遊びに慣れている人と協働で水辺や駅前広場等を活用したイベントを実施し市内外から誘客を図る。

また、カヤックやSUPなどのほか、柳川ならではの掘割での遊びやスポーツなどの開発も望まれ、それと同時に受け入れ態勢づくりが必要となる。

（3）実施主体

観光事業者、行政、DMO（観光協会）、市民

カテゴリ2 景観、環境、地域への配慮に関すること

提言2 掘割の美化・愛護活動の推進

[課題]

市民生活と調和した観光の推進

[解決の前提]

掘割を活用した観光を持続可能なものとするためには、観光客はもちろん、市民の掘割との関わりも重要であり、市民の暮らしと観光を両立させるためには、市民の生活の質を保持しながら観光施策に取り組んでいく必要がある。

(1) 解決の方策

⑩ 掘割の美化・愛護活動の推進

(2) 求められる具体的施策

市民や観光客、観光事業者などへ「観光分野から見た掘割」に関する満足度調査などを継続しながら、検証を行っていく必要がある。

また、定期的な水辺の清掃など、持続可能な掘割の維持管理ために、川下りのお客様から環境整備費をいただき、清掃活動などに活用するなどの仕組みづくりも検討すべき。

(3) 実施主体

観光事業者、行政、DMO（観光協会）、市民

カテゴリ3 観光の経済効果に関すること

提言3 観光事業者の連携を図る機会の創出

提言4 ガイドライン等の策定・遵守

提言5 船頭さんや掘割に触れる機会の創出

【課題1】

持続可能な観光事業者の発展

【解決の前提】

柳川市観光事業者の生産性向上のためには、人口減少による国内旅行客の減少や生産年齢減少に伴う労働力不足など、将来を見据えたときに『連携』は欠かすことができないものであり、多少の利害関係はあるものの、それぞれがボトムアップしながら、情報共有や相互扶助をしていくことが肝要である。

新型コロナウイルス感染症の影響により船頭さん不足が懸念される中、後継者確保のため、掘割を活用した観光に興味を持ってもらい、触れてもらう必要がある。

また、観光に来るお客様にとって「安全安心の担保」は最優先事項であることから、統一した安全指標の構築が必要である。

（1）解決の方策

⑪ 観光事業者の連携を図る機会の創出

⑬ ガイドライン等の策定・遵守

⑰ 船頭さんや掘割に触れる機会の創出

（2）求められる具体的施策

⑪持続可能な観光事業者の発展のために、まずは船会社が定期的集まる場を創出し、話し合いをすることから始める。話し合いのテーマや5W1Hの設定、その他有識者の参加など、連携の機会の継続性を担保する必要がある。

⑬海上運送法などを参考にガイドラインや川下り事業の実施条件（保険加入や独自マニュアル作成など）を設定し、遵守する仕組みを構築するとともに、乗船場許認可権限を厳格化する。

⑰船頭さん確保のためには職業としての船頭の確立が望まれる。

将来に向け、市民（子どもたち）や観光客、外国人向けの船頭体験など、遊びから入りながら、掘割の魅力や船頭の楽しさを体験してもらうなど、職業意識の向上を図る。

（3）実施主体

⑪行政、DMO（観光協会）、観光事業者

⑬行政、DMO（観光協会）、観光事業者、河川等の管理者

⑰行政、DMO（観光協会）、観光事業者

提言6 観光産業の多様な関係者の参画・連携による新たな魅力の創出 （参加型、交流型、体験型観光の推進）

提言7 観光トレンドの変化に対応した新たな観光コースづくり

〔課題2〕

ポストコロナを見据えた観光産業の高付加価値化

〔解決の前提〕

観光ニーズの多様性が求められる中、観光産業の高付加価値化のためには、観光コンテンツの質的向上（磨き上げ）が必須であることはもちろん、掘割を活用した観光事業者だけでなく、あらゆる産業が一体となった新しい面的な取組みを強化し事業化していく必要がある。

（1）解決の方策

⑳ 観光産業の多様な関係者の参画・連携による新たな魅力の創出
（参加型、交流型、体験型観光の推進）

㉑ 観光トレンドの変化に対応した新たな観光コースづくり

（2）求められる具体的施策

㉒ 観光業、商業、農業、漁業など多種多様な個人・団体と連携する会議体やイベントを創出し、観光客に満足してもらうことはもちろん、それぞれが利益を生めるシステムの構築や、川下り後の滞在時間の延長や人流を生み出す企画を創出する。

また、観光客との交流促進を目的とした市民参加型のおもてなしツアーを創出する。

㉓ 新たな乗船チケットや川下りルートの開発のほか、柳川でしか味わえないオンリーワンの体験や、期間限定の体験といった特別感のある商品開発を行う。

また、市の地域公共交通網形成計画と連携しつつ、観光客向けに2次交通の利便性向上を図る。

（3）実施主体

㉒ 観光事業者、行政、DMO（観光協会）、

その他観光業以外（商工業・農業・漁業）に携わる団体及び個人

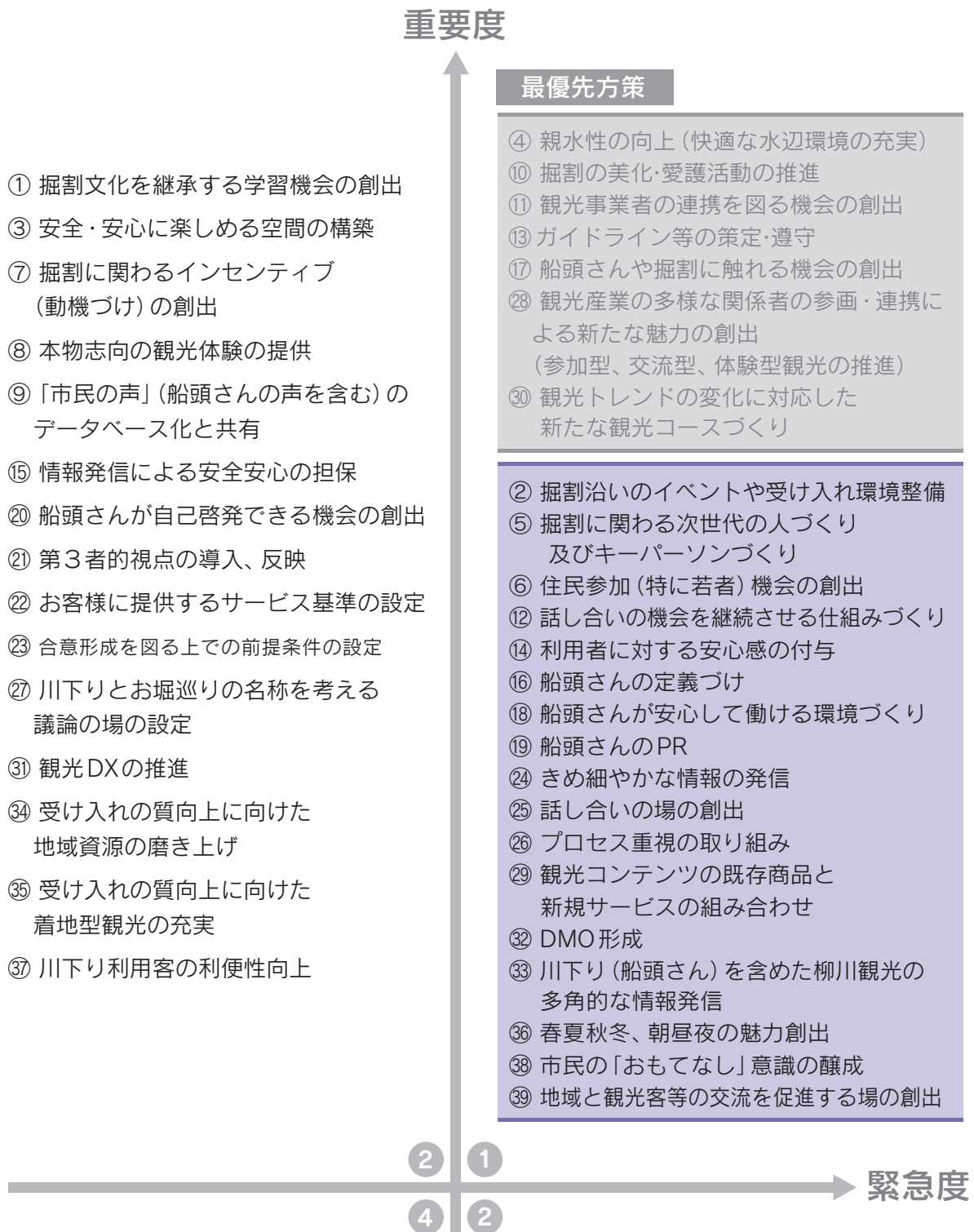
㉓ 観光事業者、行政、DMO（観光協会）

第4章

その他の取り組むべき掘割を活用した持続可能な観光推進案

※委員会のからの提言として、最重要施策以外に進捗管理を行っていくもの。

「課題解決の方策」に取り組む優先度 ⇒ 高い（重要度→高い、緊急度→高い）



カテゴリ1 水郷柳川の文化に関すること

▶ 求められる具体的施策

[課題] 市民協働による掘割の価値の再発見・創造 (シビックプライドと観光の融合)

解決の前提 掘割を楽しめる場所にするための受け入れ環境整備

解決の方策

② 掘割沿いのイベントや受け入れ環境整備

- ▶ 観光客の前に、まずは柳川市民が楽しめる水辺イベントを実施する
- ▶ カヤックやSUPなどを行う際は、快適に掘割遊びができる受け入れ環境整備を行う

解決の前提 シビックプライドの醸成

解決の方策

⑤ 掘割に関わる次世代の人づくり及びキーパーソンづくり

- ▶ 掘割でのイベント、仕掛けができる人材を育てていく

解決の方策

⑥ 住民参加（特に若者）機会の創出

- ▶ 市民が地域を愛し自慢できる郷土にするため、市民参加型の地域づくりを行う
- ▶ 地域の課題などに関心を持ってもらうため、環境などをテーマに高校生など若い人たちを巻き込む仕組みづくりが必要

カテゴリ3 観光の経済効果に関すること

▶ 求められる具体的施策

【課題1】 持続可能な観光事業者の発展

解決の前提 観光事業者の連携強化

解決の方策

⑫ 話し合いの機会を継続させる仕組みづくり

- ▶ 行政とDMO(柳川市観光協会)が主体となって進める
- ▶ DMOがどういった組織なのかをきちんと視える化する

解決の方策

⑭ 利用者に対する安心感の付与

- ▶ ガイドライン等を視える化する
- ▶ 乗下船時のケガ防止マニュアルの作成等、利用者に安心感をもってもらう仕組みを構築する

解決の前提 船頭さんの人材確保

解決の方策

⑯ 船頭さんの定義づけ

- ▶ 船頭さんの地位向上とお客様の安全確保のため、船頭さんを定義づけする

解決の方策

⑱ 船頭さんが安心して働ける環境づくり

- ▶ 船頭さんの待遇面を持続可能なものに整備する

解決の方策

⑲ 船頭さんのPR

- ▶ 船頭さんの情報を発信して(PR)船頭さんをブランディングする

[課題2] 駅西口掘割の利活用に関する合意形成の取得

▶ 求められる具体的施策

解決の前提 利活用イメージ（前情報）の視える化

解決の方策

②④ きめ細やかな情報の発信

- ▶ 情報はその都度先手先手で発信し、反対意見が出たとしても、きちんと受け止めて取り込んでいく
- ▶ 情報は観光関係者に対してだけでなく、幅広く発信する（農漁業関係者、市民など）
- ▶ 計画がある場合は先に情報を出す

解決の前提 合意形成の条件（基準）の視える化

解決の方策

②⑤ 話し合いの場の創出

- ▶ 船会社の組合設立もしくは船会社が定期的集まる場を創出し、船会社同士で話し合いをすることから始める
- ▶ まずは話し合いの場を設定し、並行して話し合いに必要となる情報発信を行う。そこで合意形成を図ってからルールづくり等詳細に関する話に移行する

解決の方策

②⑥ プロセス重視の取り組み

- ▶ 整備の目的は柳川らしい空間づくりなので、船着場の設置ありきではなくきちんと段階を踏む。試験的に始めることも視野に入れる
- ▶ 引き込んだ掘割の活用方法について話し合う場を設けるところから始める

[課題3] ポストコロナを見据えた観光産業の高付加価値化

解決の前提 観光コンテンツの質的向上

解決の方策

②⑨ 観光コンテンツの既存商品と新規サービスの組み合わせ

- ▶ 「川下り+○○商品」を造成する※○○＝地域交通、お土産、お店、食事、花火、柳川提灯、ペット同伴など
- ▶ 船内演出やエンターテイメントなどの特別な演出の仕組みづくりを行う
- ▶ 掘割での川遊びや船上での線香花火など、体験やイベントを充実させる
- ▶ 食事などの待ち時間を周遊に変える仕組みを構築する

[課題4] 満足度の向上によるリピーターの確保

▶求められる具体的施策

解決の前提 マーケティング活動の強化

解決の方策

③② DMO形成

- ▶業種間の連携の先導役・場の創設、各種情報発信のためにDMOを形成する

解決の方策

③③ 川下り（船頭さん）を含めた柳川観光の多角的な情報発信

- ▶春夏秋冬、朝昼夜、柳川で何ができるのか情報発信を充実させる
- ▶観光客に次回また来たいと期待させる仕掛け（サービス）を開発する
- ▶船会社ごとの特徴や強みを発信する

解決の前提 観光の質の向上

解決の方策

③④ 春夏秋冬、朝昼夜の魅力創出

- ▶昼夜のイベントを充実させる
- ▶夜の川下りのコンテンツを充実させる（食事、酒など）

解決の前提 受け入れ態勢の充実

解決の方策

③⑤ 市民の「おもてなし」意識の醸成

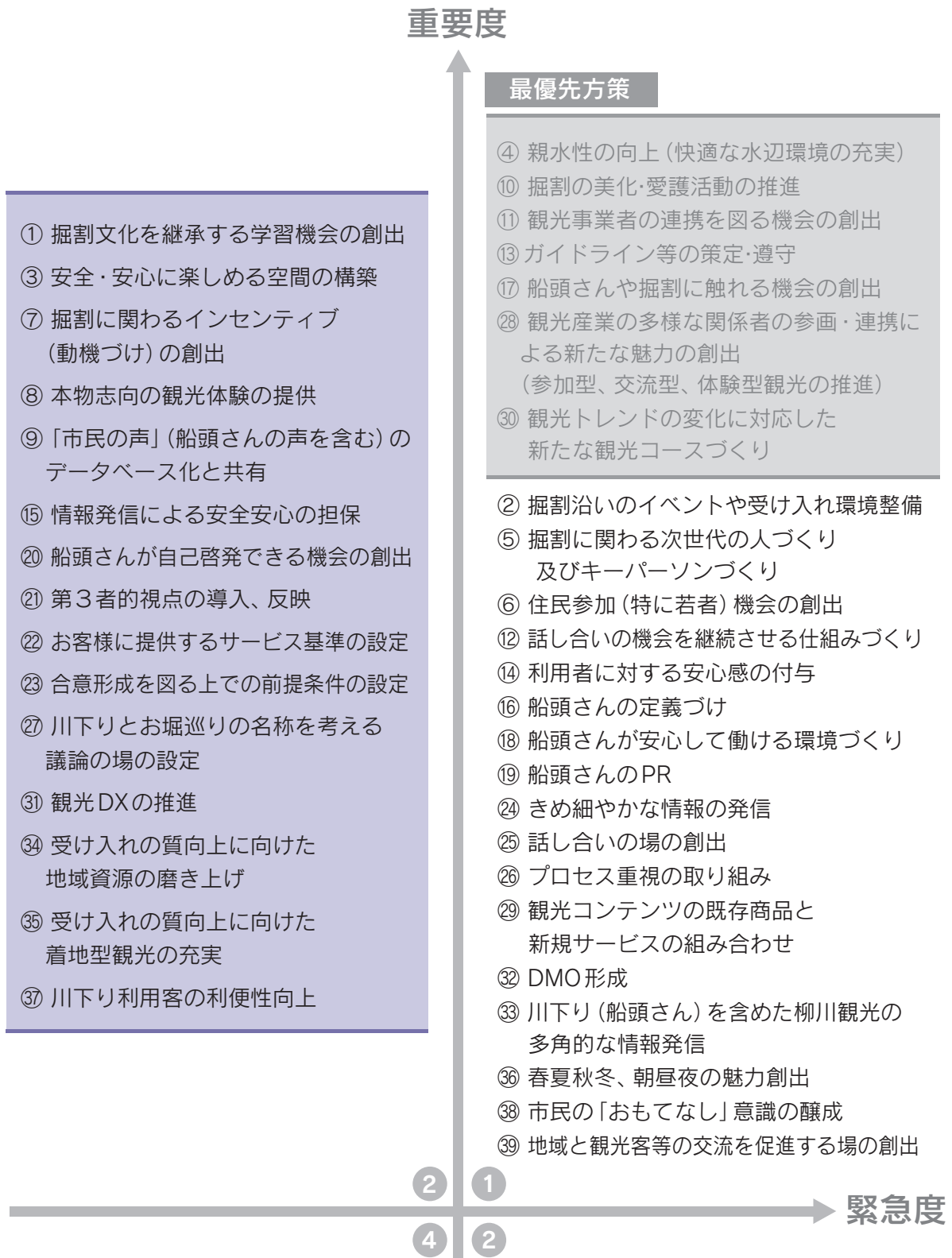
- ▶市民のあいさつ、笑顔、親切を行う意識づくりを推進する
- ▶おもてなし推進事業を通して、市民のおもてなしの協力をさらに促進する
- ▶住民満足度を向上させ「訪れてよし、住んでよし、働いてよし」のまちづくりを推進する
- ▶遊歩道沿いで小さな拠点を活用し、市民と観光客が交流するおもてなし処を創設する

解決の方策

③⑥ 地域と観光客等の交流を促進する場の創出

- ▶観光案内所などに多目的ラウンジやまちのリビングルーム等を設置する

【課題解決の方策】に取り組む優先度 ⇒ 中（重要度→高い、緊急度→低い）



カテゴリ1 水郷柳川の文化に関すること

▶求められる具体的施策

〔課題1〕次世代への掘割文化の継承

解決の前提 掘割文化を伝える仕組みづくり

解決の方策

① 掘割文化を継承する学習機会の創出

▶ 掘割の環境をテーマに、修学旅行や社会科見学などの学習機会を創出する

〔課題2〕市民や観光客が掘割に親しむ機会や親水空間の創出

解決の前提 掘割を楽しめる場所にするための受け入れ環境整備

解決の方策

③ 安全・安心に楽しめる空間の構築

▶ カヤックやSUPなどを行う際は、安全安心に掘割遊びができるよう、エリアの設定や必要に応じてルール整備の検討を行う

〔課題3〕市民協働による掘割の価値の再発見・創造 (シビックプライドと観光の融合)

解決の前提 住民全体の掘割を活かしたまちづくりの推進

解決の方策

⑦ 掘割に関わるインセンティブ(動機づけ)の創出

▶ 掘割に関わるきっかけ・動機づくりを創出する(イベント等)

カテゴリ2 景観、環境、地域への配慮に関すること

〔課題1〕掘割周辺における名勝指定(水郷柳河)にふさわしい 景観・環境に配慮した観光地域づくり

解決の前提 生活文化の復元

解決の方策

⑧ 本物志向の観光体験の提供

▶ 生物多様性・SDGsなどの意識の高まりや成熟した観光旅行マーケットへの対応として、本物志向の観光を提供する

〔課題 2〕 市民生活と調和した観光の推進

▶ 求められる具体的施策

解決の前提 持続可能な掘割との関わり 市民の暮らしと観光の両立

解決の方策

⑨ 「市民の声」（船頭さんの声を含む）のデータベース化と共有

- ▶ 川下りや掘割に関する市民の声、船頭さんが見聞きしたお客様の反応や感想などをデータベース化し共有する

カテゴリ 3 観光の経済効果に関すること

〔課題 1〕 持続可能な観光事業者の発展（持続可能な掘割観光の推進）

解決の前提 掘割を活用した観光に係る安全安心の担保

解決の方策

⑮ 情報発信による安全安心の担保

- ▶ お客様に対する情報提供の充実を図る（雨天時等の中止情報など）
- ▶ 観光協会等で情報を一元化して発信する

解決の前提 船頭さんの観光資源化（船頭さんのブランディング）

解決の方策

⑯ 船頭さんが自己啓発できる機会の創出

- ▶ 船頭さんが自己啓発できる機会を創出する（おもてなし、歴史・文化、英会話など）
- ▶ 船頭さん自身に「本当のおもてなし」を体験してもらう

解決の方策

⑰ 第三者的視点の導入、反映

- ▶ グーグルの口コミ等をフィードバックして顧客満足度及び従業員満足度を向上させる
- ▶ お客様の声を集約して船頭さんに継続的に紹介したり、船頭さんの特集記事を組む等して意識付けを図る
- ▶ マイスター制（歴史や歌など）を導入する
- ▶ 船頭さんのブランディングのため、船頭さん総選挙を実施する

解決の方策

⑱ お客様に提供するサービス基準の設定

- ▶ 柳川の歴史に関する説明など、基本的なガイドング内容を統一する
- ▶ プロフェッショナルとして出来て当たり前基準、お客様の期待に応えることが出来る基準を設定する

[課題2] 駅西口掘割の利活用に関する合意形成の取得 ▶求められる具体的施策

解決の前提 利活用イメージ（前情報）の視える化

解決の方策 ⑳ 合意形成を図る上での前提条件の設定

- ▶ 前段の情報を整理して、今がどこのフェーズなのか認識を合わせる
- ▶ 整備目的にある柳川らしい空間の“柳川らしい”とはどういうことかをきちんと共有する

[課題3] 川下りの名称の統一（川下りとお堀巡り）

解決の前提 川下りとお堀巡りの名称の統一を見据えた議論

解決の方策 ㉑ 川下りとお堀巡りの名称を考える議論の場の設定

- ▶ 川下りの名称統一について各団体が議論する場を設定する
- ▶ 英語表記についても議論の場を設け検討していく

[課題4] ポストコロナを見据えた観光産業の高付加価値化

解決の前提 観光DXによる体験価値の向上

解決の方策 ㉓ 観光DXの推進

- ▶ デジタル技術を用いて、周遊促進のための待ち時間の目安を示す仕組みづくりを推進する
- ▶ 柳川城や古いまち並みを再現するVRを推進する

[課題5] 満足度の向上によるリピーターの確保

解決の前提 観光の質の向上

解決の方策 ㉔ 受け入れの質向上に向けた地域資源の磨き上げ

- ▶ 観光客を受け入れる側の工夫、勉強、質の向上を図るための研修を実施する
- ▶ 非日常の提供や非日常の中でのさらなる偶然の非日常を体験できる機会を創出する

解決の方策 ㉕ 受け入れの質向上に向けた着地型観光の充実

- ▶ 農業、漁業、祭り、行事に参加できる体験型観光を充実させる
- ▶ 川下り途中での食事、体験メニューを造成する

解決の前提 受け入れ態勢の充実

解決の方策 ㉗ 川下り利用客の利便性向上

- ▶ お客様ニーズを満たすサービスを提供する（子ども向けのサービス、写真、歌など）
- ▶ 技能のさらなる向上や後継者育成を目的とした船頭マイスター（認定制度）を創設する

第5章

掘割を活用した
持続可能な観光推進案以外の委員の意見

※柳川市の既存条例・計画等にフィードバックし、今後検討していくもの。

※解決の方策がAグループに属するものでも、求められる具体的施策がBグループに属するものは記載。

カテゴリ1 水郷柳川の文化に関すること

[課題1] 次世代への掘割文化の継承

(1) 解決の方策

- 継承する掘割文化の定義づけとリスト化（掘割の歴史・文化・自然・機能・食文化・環境など）
- 遊びや生活の中の教育・環境教育の実施
- 掘割文化を継承する学習機会の創出

(2) 求められる具体的施策

- 継承する掘割の文化、歴史、機能などを定義づけ、リスト化する
- 柳川の学生を対象にした川下りを実施する
- 定期的に柳川掘割物語の上映会を実施し、掘割の成り立ちや役割を子供たちや市内外の人にみってもらう
- 掘割文化に詳しい人から多くの市民に掘割文化の継承を行う

[課題2] 市民協働による掘割の価値の再発見・創造
(シビックプライドと観光の融合)

(1) 解決の方策

- 掘割に関わる次世代の人づくり及びキーパーソンづくり
- 掘割に関わるインセンティブ（動機づけ）の創出

(2) 求められる具体的施策

- やる気のある団体・企業が掘割沿いの花植えなどの空間づくりに参加できる仕組みづくりを行う
- 掘割の一定区間を市民に自由に管理していただき、掘割に関わる機会を創出する

カテゴリ2 景観、環境、地域への配慮に関すること

[課題1] 掘割周辺における名勝指定（水郷柳河）にふさわしい 景観・環境に配慮した観光地域づくり

(1) 解決の方策

- 水辺環境の改善（根本的な改善と定期的な改善）
- 水辺環境改善の協力者づくり

(2) 求められる具体的施策

- 護岸を有機的な素材へ変更するなど、根本的な水辺環境の改善を実施する
- 掘干し・水落ちなどを行い、定期的な水辺環境の改善を実施する
- 水辺環境の改善（掘干しなど）に市内・外から協力者を募る

[課題2] 市民生活と調和した観光の推進

(1) 解決の方策

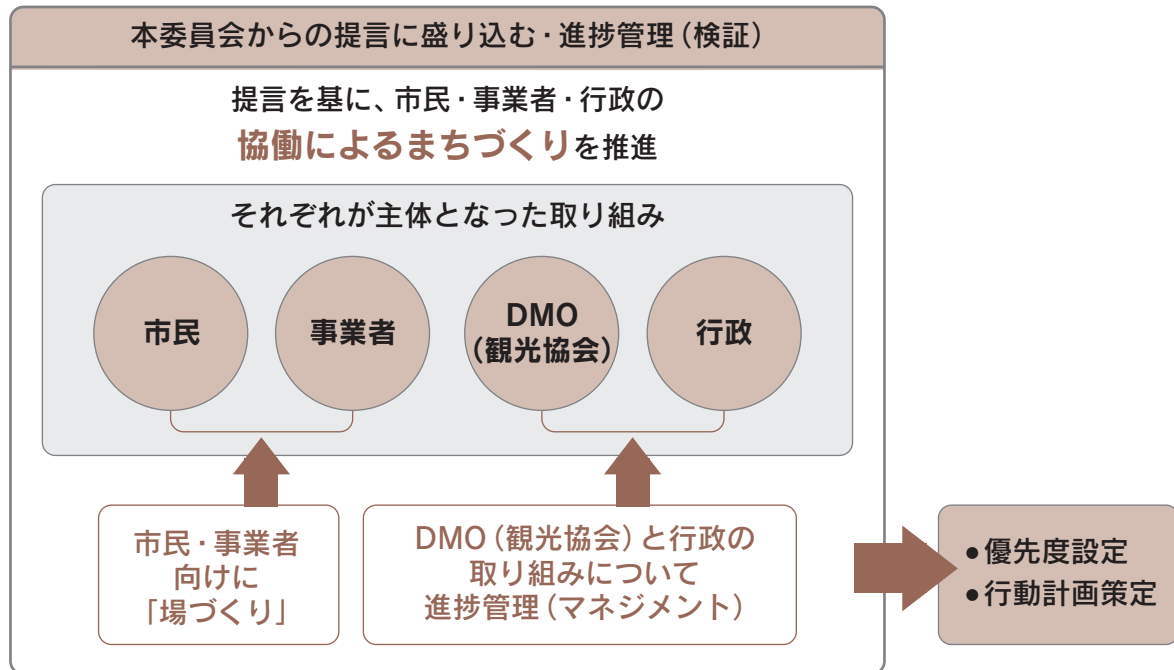
- 市民に親しみを持っていただくために水辺環境を改善する

(2) 求められる具体的施策

- 目標を設定して水辺環境を改善する

第6章 持続可能なマネジメントの確立

以上の提言を絵に描いた餅にしないためには、行政、DMO（観光協会）、観光事業者、そして市民を巻き込みながら取り組んでいく必要がある。



1. 場の創出

掘割を活用した観光を持続可能なものにするためには、掘割を活用した観光事業者や掘割に思いのある市民が話し合う場を、行政、DMO（観光協会）が主体となり構築していく必要がある。

2. PDCAサイクルの確立

行政、DMO（観光協会）は、これら各種施策を実現するため必要な施策を講じるとともに、PDCAサイクルを確立し、随時検証をしていく必要がある。

この提言を出して終わりではなく、正に今からがスタートであり、柳川固有の歴史的財産である掘割を後世に残し、持続可能な掘割を活用した観光が更に磨き上げられ、発展していくことは委員全員の願いである。

そのためには、行政・DMO（観光協会）・掘割を活用した観光事業者・市民が一円融合して協力し合う「地域力」が何よりも不可欠であり、水郷柳川ブランドの確立のため、今後の取り組みを注視しながら、今後も年1回程度この委員会を開催し、全体の動きを注視していく。

■カテゴリ毎の委員の意見

カテゴリ1 水郷柳川の文化に関すること

- 川下りの水ではない。農業用水、生活用水があつてのものと思っている。
- 城下町の時代はとっくに終わっているのに、なぜ掘割が残っているのか。なぜ今も掘割があるのかが、伝えていく部分だと思う。
- 水の会では映画「柳川掘割物語」を毎年1回は見ている。毎年上映会をやっており、掘割を知ってもらいたいと思っている。掘割物語の中に役割だとか、掘がどうやってできたとか、なぜこんな掘割があるのだとか見て貰えば、理解できる。
- 一番大事なことは掘割の話をし続けるということ。集まって講演するような話ではないので、生活の中で本当は伝えていかないといけない。
- 柳川では夜の川下りもやっているし、イベントでプロジェクションマッピングなどもやっている。新しい取り組みを、観光客向けだけではなくて、学生とか若い子たちに向けてやってみては。
- 観光客とだけでなく、先ず柳川市民が楽しむものでないといけない。地元が掘割を楽しまないと。それを観光客が見に来るといふか。柳川市民を楽しませるマインドがないといふか。
- 掘割でSUPやカヤックをいきなり沢山の人やると、安全面から考えても迷惑になる。最初はイベントのような形で年4回くらい開催してはどうか。
- 数ある行政の中でもこんな個性のある行政はないと思う。福岡県だけで60市町村あるけれど、こんな観光資源、歴史的に価値があるようなところはない。うらやましいと思う。他の市町村には無いのだから「掘割ファースト」で物事を考えていくべき。
- 掘割でSUPとかカヌーとかを使って、アクティビティなどの楽しみができたらいいい。それと同時にそういう人たちに向けた仕掛けも必要であり、積極的に遊びを作り、それがビジネスになるようなことにならないと長続きもしない。それが成功したら、「もっと掘割を綺麗にしよう」という気持ちになる。
- 海外では高速道路のような長い道の所で、区間ごとにメンテナンスしてもらい、そこに名前を付けているものがある。掘割であれば、区間ごとにどこかの団体や近所の皆さんに…という風に名前を付ける。お金だけではなく、褒めるようなインセンティブをつける仕組みを考えるといいと思う。
- 市のほうで開発公社を作って1mでも各家庭に所有させてみる。子供でも連れて行って泳がせようとする場所があるとすれば親しむ機会ができ、愛着はもっと違ってくる。自分の場所だという事があれば、花を植えて…となり、それを表彰していければよい。イギリスやニュージーランドでは年2回程度、庭の表彰規定がある。そうなれば、「隣よりいい庭を作ろう」となるのではないか。

カテゴリ2 景観、環境、地域への配慮に関すること

- 観光客と市民の満足度が違うのは当たり前のことだと思う。初めてやった人の満足度と10回やったことがある人の満足度が違うのは当たり前。様々な意見を取り入れて共有することが必要。
- 船頭さんが観光客の印象・感想の情報を持っていると思うので、ここが良いとか悪いとか、市民目線だけでなく船頭さんのたちの意見も取り入れていくべき。
- クレームは宝でありチャンス。観光事業者も含め透明性のある情報共有をすべき。
- 昭和60年頃から川下りコース沿いの清掃を御花と船会社ですずっとやっていた。それがコロナ禍になってできなくなって、今は市や観光協会にお願いしている。何年かすれば元の状態に戻れると思うので、例えば観光客から一人100円ずつなど徴収し環境整備の資金とするなど、持続可能な社会に向けてという面では考えていく必要があるのでは。
- 全国から柳川の掘割のファンを探して、独自の基金みたいなものをつくってサステイナブルな掘割だけの財源みたいなものを作るというのも必要なのでは。
- きれいな渓谷にいったら100円出すとか、環境費を徴収している所がある。将来的にはそういうのをやっていったらどうか。
- 学生の時は「掘干し」というのがあった。水を浄化して魚がいたが、やめてから不法投棄が上から下から、いろんなものが出てきて泳げなくなったという経緯がある。
- コンクリートではなく、昔ながらの有機的な自然のものに変えていくという事が一番時間のかかるところ。次が定期的な掃除。ヘド口を浄化するような。これを5年に1回なのか、3年に1回なのか、誰がどうやっていくのか、お金をどうするのか、人はどうするのかという話になってくる。
- 市民参加といっても、道守会議で「掘干しをするから掃除手伝ってください！」と言うと福岡あたりから学生や近場の企業が集まってくれる。人手がない訳ではない。ただ、出来上がったところを掃除するだけでは面白くない。クリエイティブではない。
- 柳川市立の小中学生を巻き込んで、年中行事としてやるというのも一つの手法。
- 若い世代の水に関するイメージが少しずつずれている。私は原体験として、堀で泳いでいた、堀でお茶碗を洗っていた。そこまで戻すのか。もしくは昭和40年代の掘割物語の再生された時代、ドブ川がきれいな川になった時代に戻すのか。そのあとの40年はそこからいっこうにきれいになっていない。どこまできれいにするのかは議論が必要。
- 重要なのはどこの時代まで戻すか、50、60、70年前、どこかの時代に戻すというところで旗を立てて、それで石垣とか土塁にするとか考える。物理的に上水道にはならないけど、上水道並みの綺麗さに戻す。そのためにどうするか、学術的な視点も入れて研究していくのは大事だと思う。

カテゴリ3 観光の経済効果に関すること

- いきなり船会社の組合の話だとハードルが高いかもしれないので、まずは皆が集まって話し合う場を作る。また、話が広がりすぎて物別れにならない様に「課題に対して改善すること」とか「魅力を付加するために連携できること」といったテーマを決めて行うことが必要。
- タクシー・バスにしても組合がある。組合が出来ればリーダーが出てくる。それが一番理想的ではないか。もちろん船会社さん達にも事情はあるだろうが、組合があればルール作りも簡単ではないか。
- 船会社さんで協議会のようなものを作って、みんなで一緒にできることを考えていつてはどうか。その中で一体感も出てくるのでは。
- 一番大事なのは、形に拘らずに次世代を担う観光事業者の人たちが自主的に集まって、話し合うことから始めなければならぬ。
- 台湾のお客さんに来て欲しいのであれば、台湾人の船頭さんを雇ったりするとそれが売りになるかもしれない。
- 最初から仕事だと嫌がられるので、まずは遊んでもらうのが一番いい。楽しい部分から体験してもらおう。船を使いたいときは連絡をもらえればどんどん使ってもらおうなど体験してもらおうことが必要。
- 委員会でのアンケート結果を見ると16歳のゾーンが一番川下りをしたことがないと出ているので、将来のことを考え出す時期に川下りに触れる機会を作ってみてはどうか。
- 「船頭さんにはこういう人がいます」とか、「船頭さんがこんな取組みをしました」とか、現場の人に喜んでもらう取組みが必要。そうすると意欲も上がるし、船頭さんのステータスが今より上がって行けば、もっと人も集まり、後継者不足の解消になるのでは。
- 川下りが始まった当初よりも色々な基準は厳しくなっている。お客さんが求める安全安心も同じ。ガイドライン等が何もないというのはありえないと思う。道路に道路交通法があるように、海上運送法に準拠するものなど掘割を使う上でのある程度のルールづくりは必要ではないか。
- 社内の安全管理規定などの取り決めはもちろん、出発時に確認する内容などマニュアル化して船頭さんに持ってもらってはどうか。
- 川下りを始めるのに乗下船場の占有許可のみというのはおかしい。利用者に安心感をもってもらうためにも、決め事と規制が必要だと思う。
- 船会社で統一するのか各社それぞれ作るのかは別にして、安全管理規定などがないと実際に営業できない。
- 高付加価値について、観光業だけでは無理だと思う。多種多様な個人・団体との連携が必要。団体は団体で動きたがるが、実は、個人の方がパワフルでアイデアがある。特に若い人にとって世の中は色々な制限がある。そういった踏み出したくても踏み出せない若い人たちを発掘して、連携できたらいいと思う。

- ポストコロナは観光業だけではなく、柳川には飲食業、旅館もある。観光業だけでなく飲食業やホテルの人達とも協力協同して、その一つの業種で新しいことを考えるのではなくて、これとこれをプラスしたらより良い新しいものができるといった取り組みをしていったらいいと思う。新しい柳川の観光コースを作る。今までつながったことが無いけれど、これを機に繋がって新しいものが生まれるということがあってもいい。
- 川下り自体の価格を上げていくために認定制度(マイスター制度)を作る。公認マイスターが運航する船は高めにする。こういうシステムがあると皆がマイスターを目指して勉強し、競争が生まれる。それによって認定された人は賃金が上がる。マイスターの船に乗れるというプラスの価値が付き、船代を上げて海外の人はいいと思ってくれる。
- 訪れていい地域というのは、住んでいい地域かつ働いていい地域。住民満足度が向上すると、おもてなしの心が自然と出てくる。逆に生活が苦しいとみんな下を向いてしまい自然なおもてなしができない。みんなにはナチュラルなフレンドシップをつくってほしい。
- 旅行会社の方や市外の方は船がどこを通っているか分からない。ルートを明確にすることで付加価値も高まるのではないかな。
- 色々な体験型のコースを作ってみるのもいいのではないかな。例えば“さげもん作り”を体験プランとして組み込むことで価値が付けられるのでは。
- 船中食があるが、まだまだ認知度が低い。貸し切り船プラスうなぎ、紅茶やコーヒーとケーキといったプランなど、満足度が上がれば観光客はお金を出す。
- 地元のお菓子をセットにした乗船券などの「お土産引換券」があってもいいのではないかな。他のお店と提携して好きなものを選べるなど、様々なアイデアを出し合っていくべき。
- この会社だったらお見送りがいいとか、この会社だったら歴史のことをすごく話してくれるなど、共通じゃなくても船会社ごとの特徴が出せれば。それがSNSなど口コミで拡散していく。
- 2次交通の利便性向上を図った方がよい。交通の基本は安全・安心なので、緑ナンバーのバス、タクシーの事業者との連携など、そこがきちんと担保された手段を講じるべき。

令和3年度 掘割と観光の共生のあり方検討委員会 委員名簿

No.	種 別	団 体 名	名 前
1	学識経験者	九州産業大学	千 相哲
2	学識経験者	福岡地域戦略推進協議会 九州大学地域政策デザインスクール	大井 忠賢
3	官公庁	九州運輸局	鈴 恭博
4	観光推進団体	(一社)九州観光推進機構	濱崎 隆
5	官公庁	福岡県	吉田 憲和
6	観光推進団体	(公財)福岡観光コンベンションビューロー	中川 久美
7	交通事業者	西日本鉄道(株)	大田 隆
8	観光事業者	(有)フクオカ・ナウ	ニック・サーズ
9	議会	柳川市議会	緒方 寿光
10	観光推進団体	柳川観光活性化協議会	立花 寛茂
11	行政区長	柳川市行政区長代表委員協議会	中川 辰藏
12	商業団体	柳川商工会議所	與田 武文
13	商業団体	柳川市商工会	諸藤 悟
14	農業団体	柳川農業協同組合	古賀 慶志郎
15	漁業団体	福岡有明海漁業協同組合連合会	西田 裕一
16	市民団体	柳川市地域婦人会連絡協議会	藤木 利美子
17	市民団体	水の会 柳川市文化協会	立花 民雄
18	市民団体	“おもてなし柳川”市民会議	山田 三代子
19	市民団体	まちづくりネットワーク柳川	川口 聡
20	観光事業者	柳川観光開発(株)	亀崎 博司
21	観光事業者	(株)大東エンタープライズ	工藤 徹
22	観光事業者	水郷柳川観光(株)	森田 繁光
23	観光事業者	(有)城門観光	元山 和志
24	観光事業者	白秋丸観光	古賀 健吾
25	観光事業者	柳川リバー観光(株)	三小田 一美
26	観光事業者	マル江遊船	江口 勝哉
27	観光事業者	水上売店 一期一会	武藤 賢一郎

令和4年度 掘割と観光の共生のあり方検討委員会 委員名簿

No.	種別	団体名	名前
1	学識経験者	九州産業大学	千 相哲
2	学識経験者	福岡地域戦略推進協議会 九州大学地域政策デザインスクール	大井 忠賢
3	官公庁	九州運輸局	大久保 栄作
4	観光推進団体	(一社)九州観光推進機構	濱崎 隆
5	官公庁	福岡県	吉田 憲和
6	観光推進団体	(公財)福岡観光コンベンションビューロー	中川 久美
7	交通事業者	西日本鉄道(株)	草場 康文
8	観光事業者	(有)フクオカ・ナウ	ニック・サーズ
9	議会	柳川市議会	緒方 寿光
10	観光推進団体	柳川観光活性化協議会	立花 寛茂
11	行政区長	柳川市行政区長代表委員協議会	中川 辰藏
12	商業団体	柳川商工会議所	與田 武文
13	商業団体	柳川市商工会	諸藤 悟
14	農業団体	柳川農業協同組合	古賀 慶志郎
15	漁業団体	福岡有明海漁業協同組合連合会	西田 裕一
16	市民団体	柳川市地域婦人会連絡協議会	藤木 利美子
17	市民団体	水の会 柳川市文化協会	立花 民雄
18	市民団体	“おもてなし柳川”市民会議	山田 三代子
19	市民団体	まちづくりネットワーク柳川	川口 聡
20	観光事業者	柳川観光開発(株)	亀崎 博司
21	観光事業者	(株)大東エンタープライズ	工藤 徹
22	観光事業者	水郷柳川観光(株)	森田 繁光
23	観光事業者	(有)城門観光	元山 和志
24	観光事業者	白秋丸観光	古賀 健吾
25	観光事業者	柳川リバー観光(株)	三小田 一美
26	観光事業者	マル江遊船	江口 勝哉
27	観光事業者	水上売店 一期一会	武藤 賢一郎